

2012年度 第18回 外国語コンテスト (名古屋校舎) 報告

外国語コンテストは2013年度も11月に開催されます。詳細は10月ごろお知らせします。

ことしはあなたもぜひチャレンジを!!

英語部門

2012年度外国語コンテスト英語部門は、11月1日(木)の午後に実施され、10名の参加者が自作の英語スピーチを発表しました。

審査委員には、本学法学部のハミルトン先生と、南山大学のドライデン先生をお迎えし、スピーチの内容、表現の正確さ、発音の流暢さ、プレゼンテーションのスキルの観点から評価をして頂きました。

審査の結果、入選者は以下の通りとなりました。

- 1位 08C8183 林 在訓
- 2位 11M3120 辻 法子
- 3位 11J1189 加藤 文香
- 3位 10M3050 木村 貴仁

林くんは“The Real Sense of Language”というタイトルのスピーチで、自身の日本語と英語の学習経験を基に、言語を学ぶことはどういうことかについて考察を加えました。流暢で分かりやすい英語で、身振りを交えて伝えられた点が評価されました。

辻さんは“The Significance of English Skills in This Age of Globalization”というタイトルのス



表彰式会場にて 入賞者のみなさん
2012年11月29日

ピーチで、グローバル社会の中で企業における英語の重要性を論じました。明瞭で聞きとりやすい発音と、経営学部生らしい視点が評価されました。

加藤さんは“A Friend's Importance”というタイトル、木村くんは“Thinking”というタイトルのスピーチで、両者とも恋愛の楽しさと悲しさについての内容となり、3位を分け合う結果となりました。

入賞者以外のスピーチも、それぞれに完成度が高く、また個性豊かなものでした。今回は新キャンパスに移転して初めてのコンテストでしたが、例年に比べて教員や学生の観覧者も多く、恒例となっているコンテスト後の茶話会も盛況となりました。

(石原 知英)

ドイツ語部門

2012年度の名古屋語学教育研究室主催第18回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2012年11月19日(月曜日)の午後6時10分より名古屋校舎講義棟8階にあるL802教室でおこなわれました。その結果を報告したいと思

います。

今回の課題は、有名なグリムの童話から、“Sneewittchen”（『白雪姫』）を選びました。内容は、皆さんご存知のことと思います。残念ながら時間の制約があり、物語の冒頭でお妃様が鏡に問いかけるあの有名な場面までをあつかうこととしました。参加者は1年生を中心に4年生までと幅広く、人数は15名と、ドイツ語部門としては昨年と同様かなりの人数が集まりました。

審査にあたったのは、愛知大学名古屋校舎でドイツ語を担当している2人の教員で、国際コミュニケーション学部所属のグロス先生と経営学部所属の島田です。表現力と発音・アクセントの合計点で審査をおこないました。

課題文は短いものではありませんが、授業のテキストとは違い、現代では使われない少し古い表現や文法もあり、十分な練習が必要です。参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、その完成度は高くいずれも優劣つけがたいものでしたが、残念ながらわずかの差で順位を決めなければなりませんでした。その結果は、第1位（優勝）林興弘さん（12K1108）、第2位平原加奈さん（12K1031）、第3位木村栞さん（12M3244）となりました。

今回が名古屋市ささしま地区にあるキャンパスでの最初のコンテストになりました。それまでの3学部から5学部へと対象の学部の数も増え、参加者の層は今まで以上に厚く多彩となり、今後の発展がますます期待できる結果となりました。最後になってしまいましたが、この場を借りてコンテストの実施に協力いただいた皆さんにお礼を申し上げます。

（島田 了）

フランス語部門

2012年度のフランス語部門コンテストは11月22日（木）に笹島校舎の図書館・ミーティングルームにておこなわれた。12名の学生が応募してくれたが、当日、1名の学生が体調不良により欠席したので、11名でコンテストをおこなった。

昨年までは出場者の大部分が1年生であったが、笹島校舎に来てから、フランス語を継続的に勉強する学生が増えたので、1年生4名、2年生6名、4年生1名という構成で、今まで以上にレベルの高いコンテストが期待された。

予選部門ではフランスの代表的なシャンソンである *Au clair de la lune*「月明かりで」を選んだ。歌うも良し、朗読するも良し、学生の主体性に任せることとした。

予選の結果はやはり上級生の強さが目立ち、4年生1名、2年生4名、1年生2名の7名が決戦に進んだ。

決戦ではシャンソンにちなんで、フランス国歌の「ラ・マルセイエーズ」とした。田川先生が事前に音源を用意してくださったので、学生諸君にはその場でだいたいの雰囲気は飲み込めてもらえたようである。

予選を勝ち抜いただけのことはあって、ハイレベルの決戦となったが、国際コミュニケーション学部のラッセン先生を中心として審査していただいた結果、以下のような順位となった。

1位：11J1266 高瀬 裕介

2位：09K1031 志知 眞梨彩

3位：11J1269 奥村 萌子

1位の高瀬君は昨年に引き続き、2年連続の優勝となった。ほとんど間違いのない安定した朗読ぶりであった。2位の志知さんは留学を終えたばかりで、フランス仕込みのすばらしい発音であったが、初めてのコンテストで若干緊張

したのか、いくつかミスをしたのが悔やまれるが、その発音の美しさはロビーの学生からもため息が出るほどであった。3位の奥村さんも極めて正確な発音で、来年、再来年と更に発音が上達するであろうという伸びしろを感じさせる朗読であった。

今後とも学生諸君が継続してフランス語を学習して、フランス語コンテストがその成果を発表する場となるように祈っている。

(中尾 浩)

中国語部門（現中以外の四学部）

中国語部門は専門で学習している現代中国学部以外の4学部の学生を対象に、ピンインなしの中国語の課題文章の「朗読」でコンテストを実施しています。法、経営、経済、国際コミュニケーションの4学部の1、2年生で中国語を必修で履修している学生はあわせて700名近くいる訳ですが、今回のコンテストにエントリーしたのは1、2年生あわせて10名ほどでした。参加人数こそ少なかったのですが、どの参加者もそれぞれの学習段階から見ても立派な発表をしました。コンテストでは鄭高咏、葛谷登、塩山正純の3名の中国語教員が審査を担当し、主に有気音と無気音、声調、子音や母音が中国語の音としてきちんと発音出来ているか、それから表現や話すときの抑揚など話し方のテクニックがどれだけ身に付いているか、を基準にして見させて貰いました。とくに上位の3名程は甲乙つけがたかったのですが、審査の結果、第1位には国際コミュニケーション学部2年生の杉浦淑美さんが選ばれました。杉浦さんの専門は英語ですが、中国語の学習にも熱心に取り組んでいて、文法や会話の授業で積極的に学んでいることに加えて、コンテストに参加して沢山練習したことが彼女の中国語学習にとってかなり

プラスになったはずです。

コンテストに参加することで「もっと上手に中国語を話したい」という気持ちも強くなります。今年は是非たくさんの皆さんに参加して貰いたいと思っています。

(塩山 正純)

中国語部門（現代中国学部）

第18回外国語コンテストは、ささしま新校舎移転後初のものとなりますが、中国語部門（現中）は、2012年11月22日（木）16:00よりL805教室で、課題部門15名、自由部門9名の計24名の出場者の参加を得て、滞りなく行われました。審査は楊琳先生、陳煒芳先生、薛の3名があたりました。

課題部門は1年生を対象とした課題文の暗誦ですが、15名の出場者がありました。課題文は日本でもよく知られている“塞翁失馬（塞翁が馬）”のお話です。発音、習熟度、内容・表現といった観点から、バランスの取れた表現力が求められます。出場者一人一人の真剣さとそれぞれ独自の工夫に、授業では見られない一面の新発見と微笑ましい思いにさせられ、会場は始終温かい雰囲気に包まれました。

審査の結果、下記の3名が入賞しました。

第1位 12C8064 杉浦 健斗

第2位 12C8073 前田 春香

第3位 12C8069 蛭江 菜穂

第1位の杉浦健斗君は豊かな表現力とパフォーマンスで観衆の笑いを誘いました。第2位の前田春香さんはきれいな発音と自然な語調で私たちを感動させてくれました。第3位の蛭江菜穂さんは一文字たりとも間違えまいと日頃の勉強の姿勢をそのまま見せてくれました。

自由部門は、昨年の出場者が少なかった反省から、今年は早めの準備を呼びかけたのが功を

奏して9名の参加者がありました。内容は実に多岐にわたって様々ですが、どれも自分の考えをしっかりと述べるものでした。

審査の結果、次の3名が入賞しました。

第1位 09C8116 川本 結衣

第2位 11C8015 白石 香織

第3位 11C8003 持田 三琴

第1位の川本さんは“我对中国的印象（中国の印象）”というテーマで、中国留学中の見聞を流暢な文章と巧みな表現と豊かな表情で語ってくれました。第2位の白石さんは“改变命运的通知（運命を変えた通知書）”というテーマで中国語勉強のきっかけを、第3位の持田さんは“你的大学生活过得好吗（充実した大学生活を送っていますか）”というテーマで現地インターンシップに参加するきっかけを、語ってくれました。入賞者以外にも中国研究や国際交流、大学生活を、特筆すべきは1年生からの出場者2名は日中関係というタイムリーなテーマを取り上げました。また、河村祥太君、勝股達君の2名は選考対象外でも参加して、みんなにより手本を示してくれました。参加者全員に対して、その勇気と努力を讃え、感謝申し上げます。

（薛 鳴）

ロシア語部門

みんなでうんとこしょ！どっこいしょ！！

昨年、はじめてロシア語部門が参加となりました。しかしながら、名古屋校舎でのロシア語学習者は1年生が30名近くいるものの、2年生以上はほんの数名。新規参入者としてはつらいところ。そして過去の経験がないためテーマ選びも難航。歌ってもらおうか？早口言葉をやろうか？いろいろ悩んだ結果、子供のころに誰しも読んだことのある「おおきなカブ」を朗読

課題としました。

『うんとこしょ！どっこいしょ！』で有名なトルストイの民話「おおきなカブ」は同じフレーズが繰り返し出てくるというロシア民話特有のテキストですが、『おじいさんの後ろにおばあさん、おばあさんの後ろに……』の部分はどんどん早口で、しかしその後の『うんとこしょ、どっこいしょ』の部分はゆっくりという風に緩急をつけて読んだり、朗読者がラジオドラマばりに声で演技ができるテキストでした。ムードルにもYouTube上の「おおきなカブ」のアニメもupし、テキストは授業内でも解説しました。

コンテスト参加者はそれぞれに練習をして本番に臨んでくれたので、甲乙つけがたく、入賞者を決めるのが難航しましたが、とりわけテキストに緩急をつけて情感たっぷりに朗読し、このテキストの面白さを表現してくれた山本高央さん（法学部1年）が優勝、正確な発音でテンポよくリズムカルな朗読で審査員を感心させてくれた古田圭さん（国コミ1年生）が2位、そしてはっきりとした発声で朗々と朗読しロシア語の響きの美しさを実感させてくれた溝口智哉さん（経済学部1年）が3位となりました。全体として、ロシア人審査員山崎タチアナ先生（1年生会話授業の担当）が感心するほどの出来栄で、『入賞は3位（3人）まで』というコンテストルールに審査員は最後まで苦しめられた第1回ロシア語部門でした。

ロシア語部門は今年もやります！みなさん、ふるってご参加を！

（清水 伸子）

韓国・朝鮮語部門

第18回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」の部の本選は2012年11月12日（月）18時10分から実施されました。参加学生は14名で、選択科目として韓国語を受講している2年生以上の学生が多く参加し、激しい競争を繰り広げました。今回は自由作文で挑戦する学生も多く、やる気が今まで以上に伝わってきました。人数は14名と少数ではありましたが、コンテストの準備をしている段階から高い実力の持ち主が多数おり、本選当日もレベルの高さに審査員を悩ませました。その中から受賞者は以下の3名となりました。

第1位 10M3267 加藤 里沙

第2位 09M3229 榊原 涼子

第3位 09J1198 大西 浩生

審査員は、常石先生と韓の二人が担当しました。毎回感じることでありますが、参加者誰もが入賞者に負けないくらいの実力保持者であり、それを遺憾なく発揮してくれたという点を特に記しておきたいと思います。

（韓 銀映）

タイ語部門

タイ語が名古屋校舎においても第2外国語として履修できるようになって半年、ついに!! タイ語が外国語コンテストに出られる日が来ることになりました（パンパカパーン）!!

タイ語部門としましては、学生さんたちが将来タイの人々と仲良くしたりする上で使える技能（会社の接待とか宴会とかも含む）の習得を通じてタイ語力を向上させてほしい、というコンセプト（「宴会とかで受けそうな芸を身に着けよう!!」の合言葉）のもと、タイの人々も大好きなカラオケで活躍できそうな歌謡曲の歌唱

を課題として設定しました。曲名は『チーウィット・マイ（新しい人生）』です。

2012年11月20日16時30分、L703教室は、9人の応募者の熱気に包まれていました。誰が1位の賞金栄冠を手にするのか、いやがうえにも空気が盛り上がっていきます。審査には、『タイ語基礎』を担当する加納のほか、『タイ語入門』担当のイサラー先生、そして審査補助にはタイからの交換留学生でタイ語クラスの人気者オームさんことプライヤーさんが当たりました。応募者は、緊張の中にも鼻の先にぶら下がった賞金栄冠を目指して、みんな精一杯の歌唱でそれぞれの『新しい人生』を表現してくれました。タイ語の発音はもちろん滑らかで、『のど自慢』に出ても満点が取れそうな人からカーンという感じの残念な人まで、心を込めて歌ってくれている様子が感動的で、審査員席は感涙によってチャオプラー川級の洪水が起きてしまうかにも思えるほどでした。出場者はどうだったかわかりませんが、少なくとも審査員にとっては、とても楽しいひと時でした。

結果、かなりの接戦ではあったものの、次の方々が入賞しました。

1位 12M3076 太田 早紀学生

2位 12M3636 百瀬 勝樹学生

3位 12K1071 丸山 翔也学生

経営学部生の活躍が目覚ましかったです。将来、今回の課題も活用して、会社とかでタイの人たちと円滑な関係を築いてほしいものです。参加者の皆さん、がんばって!! そしてありがとう!!

（加納 寛）

日本語部門

名古屋校舎では約330人（2012年現在）の外国人留學生が学んでいます。外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない学生を対象に開かれています。今回は2012年11月20日（火）に行われ、「留學生の見た日本」というテーマで、自分の体験を盛り込み、身近な出来事を通して考えたことを、自分のことばで述べることが課題でした。

1年次の留學生は全員参加でこのコンテストに臨みました。全部で70名近くになりますからクラス予選を行いました。日本語の5クラスからそれぞれ2名の代表者が選ばれ、計10名が本選に進みました。また、二年生の自主的な参加者もあり、協定留學生を加えて13名で競うことになりました。

留學生は日本に来た当初は文化の違いに戸惑います。けれど、彼らのスピーチからは異なった文化を経験することで成長する自分というメッセージが伝わってきます。友人とのつきあいや大震災後の日本人のふるまいから日本理解を深めていった人、日本人のつきあい方に中国流のコミュニケーションを加味して友達の輪を広げた人、自国タイの文化を重ねて日本の子供たちは家族をもっと大切にと話した人。出場者のスピーチからはカルチャーショックを成長の糧としてきた留學生活の様子がうかがえました。

審査は、日本語科目担当教員4名（山本・梅田・鈴木裕子・水木）、学生審査員2名（留學生・日本人学生ともにスピーチ入賞経験者）、聴衆約70名の投票によって行われ、接戦の末3名の入賞者（敬称略）が決定しました。

- 第1位 12C8204 佟 安琪（トウアンキ）
「心の絆」
- 第2位 12ES1001 ファンルーン プライヤー
「家族のなかで」
- 第3位 11K2138 烏 寧奇（ウニンチ）
「私の工夫」

次回の外国語コンテスト日本語部門には、日本人学生のみなさんもぜひ聴衆の一人として聞きにきてください。いつも見ている日本とは別の側面を見せてくれることでしょう。

（架谷 真知子）



民話「大きなカブ」の挿絵(1970年)
ロシア人挿絵画家ヴァスネツォフの作品

外国語コンテスト 入賞作

〈英語部門〉

The Real Sense of Language

08C8183 林 在訓

There are lots of international students in Aichi University. They came from various countries to learn Japanese at a university in Japan, where they can always hear Japanese and they are required to use it. I am very interested in learning languages, so I have studied Japanese all by myself and I am currently learning Chinese in addition to Japanese.

It was when I was a middle school student that I got interested in Japanese. I traveled to Japan and it was my first experience to visit a foreign country. I was really surprised because it was true that no one understood what I said and it was true that I was actually in Japan, not in Korea. I was just a small fish in a big pond. Though I was confused in the unfamiliar place, I decided to go to a restaurant. I felt thirsty and I wanted to order water, so I tried to figure out how to say "Water please" in Japanese. As soon as I found the sentence in a dictionary, I said "Omiz kudasai." The waiter understood what I said and brought me water kindly.

I was just shocked at this fact. I didn't know what the meaning of *omiz* is and I didn't know what *kudasai* means, either. I can't forget the moment when the waiter brought me water, though my Japanese was not perfect. Is it the same way that babies feel happy whenever they mumble and people around them understand what they say? This event taught me the pleasure to communicate in

Japanese. It motivated me to study Japanese harder, and time has passed; now I am studying Japanese in Aichi University, Japan!

Throughout the study of Japanese, I have met a lot of people. They are from various countries like England and China, but we communicate with each other in Japanese, which is a foreign language for all of us.

Currently Japan and Korea face terrible difficulties in job hunting. Therefore, quite a few people who want to get a better job are learning the third language to enhance their capabilities. However, I do want to ask a question. Is it really useful for you?

In my opinion, if you learn the third language without any concrete desire, the study is useless and the language has become a dead language for you. Even if you get a high score in TOEIC test or JPT (Japanese Proficiency Test), I don't think it brings you the same amount of happiness as the one people with a strong will have.

I want to claim that learning a foreign or international language is for communication, not for studies. I hope all the audience here will have the same experience as I had at my first travel to Japan. I also agree with my opinion that the real joy of getting knowledge of foreign languages is not to get a good score in the test but to communicate well with various people.

Thank you.

〈中国語部門（現代中国学部）〉

我对中国的印象

09C8116 川本 結衣

今天我来讲讲我对中国的印象。

首先，还要从我跟中国的相遇说起。我13岁时跟父母第一次去中国旅行。那次只是在上海走马观花。当时的上海已经有了东方明珠塔之类的现代化建筑，我们还游览了外滩，外滩的美丽夜景让我一饱眼福。我虽然去过很多国家，但是从来没有感觉到这么深的印象。去中国前听说中国是一个非常落后的国家，到中国一看让我大吃一惊，跟我想象的恰恰相反，上海已经是一个现代化的大都市。真是百闻不如一见。在那里到处可见高楼大厦，我觉得比我住的城市··名古屋发达得多。在那儿我好像突然遇见我的意中人一样，对中国是一见钟情，喜欢上了上海。就这样我对中国产生了兴趣，我毫不犹豫地决定要学习中文。

因为那次旅游在中国呆的时间很短，只是走马观花。去年我到上海留学时仔细观察了中国，发现中国和日本有很多地方不同。

比如，在中国急性子人很多，他们在洗手间人多时也不排队，买东西的时候也一样，更让我吃惊的是在地铁站，车一开门没等要下车的人下完，站台上的人就冲了进去，这太有点一厢情愿了。所以我听到过有些日本人说中国人没有礼貌等等。

但是，我觉得我们到别的国家要入乡随俗，享受跟自己国家的文化和生活的差异，才能更好地了解那个国家。我有一次一个人坐火车去天津，车开不久，我周围的几个不相识的人开始打起了牌，边吃东西，边聊天，好像久逢老友一样。他们好像一眼看出我是个老外，用很好奇的眼光看着我。当时我也无事可做，感到很无聊。所以应邀参加到6个人的游戏圈里。

我们原本都是陌生人，不到半个小时大家就成了朋友。我感觉中国人的人和人的距离比较近，

短时间里能够融洽无间，他们要说的话似乎是无穷无尽的。

很多中国人喜欢热闹，跟我们日本人不一样。每次我到那里，那种热闹劲儿都会给我很多生活的力量。

由此可见，每个民族都有长处和短处，我希望中国能扬长避短，越来越好。

〈韓国・朝鮮語部門〉

두가지의 친절함

10M3267 加藤 里沙

오늘은 제가 한국에서 여행을 하면서 느낀 것을 말하려고 합니다.

저는 지금까지 두 번 한국에 간 적이 있습니다.

하지만 두 번의 여행 중에 저는 몇 번이나 길을 잃었습니다.

그럴 때마다 언제나 친절한 사람이 말을 걸어 주었습니다.

일본에서는 이러한 친절함을 느낄 수 있는 일이 별로 없다고 생각합니다.

한국에서 느끼는 친절함은 일본의 친절함과 차이가 있다고 생각합니다.

한국의 친절함이란 피부로 느낄 수 있는 직접적인 친절함, 그리고 일본의 친절함이란 마음으로 느낄 수 있는 조금은 소극적인 친절함이라고 생각합니다.

한국을 여행하면서 저는 한국의 친절함, 그리고 일본의 친절함을 알게 되었습니다.

한국의 친절함도 일본의 친절함도 소중한 친절함이라고 생각합니다.

저는 이 두가지의 친절함을 모두 배우고 싶습니다.

지금까지 저의 발표를 들어주셔서 감사합니다.

心の絆

12C8204 佟 安琪

友達と言えば、何でも話せて、相手が困った時、積極的に力を貸すというものだと思います。日本に来る前に、日本人の友達を作ろうという考え方は全然なかったのです。日本語はあまり喋れませんし、考え方も違いますし、友達になてなれないだろうと思っていました。

初めて日本に来た時、日本人は自分の思いを他人にあまり伝えず、また、他人がいやがるようなことは言わないというイメージでした。中国人だったら、仲がいい友達にどこがいいのか、どこが悪いのか、はっきり相手に伝えるタイプですが、日本人はちょうど逆でした。今考えたら、たぶんこれは国と国、人と人の違いかなあと思います。

2年前、私は一人の日本人の友達ができました。バイト先の美紀という可愛い女の子です。ある日、二人一緒に遊びに行こうと約束しました。歩いている時に、私は自然にその子の手をつなぎました。すると、美紀ちゃんから日本では、女子と女子がみんなの前で手をつなぐと、ほかの人たちが「レスビアン」と勘違いするということを言われました。

美紀ちゃんは優しいというか、人を惹きつける魅力的な女の子です。彼女はいつも笑顔で、細い目は三日月のようでした。去年の冬は、二人で一緒にスケートをしました。美紀ちゃんがミニスカートををはいていたので、すごく寒いんじゃないかと感じました。「寒くない？」と聞くと、彼女は「ううん～全然」と答えました。でも、足を触ってみると、とても冷たかったです。そして、その日は、美紀ちゃんから日本の女子はどんなに寒くてもスカートが最高だということを知りました。

その後、私はそのバイトを辞めました。そし

て、いろいろな種類のアルバイトを試してみて、新しい日本人の友達もできました。でも、最初一番つらい時にできた友達はどうしても忘れられません。彼、彼女たちは日本語学校では勉強できないさまざまな知識を教えてくれて、私のつたない日本語を辛抱強く理解してくれました。私たちは一緒に笑って、働いて、遊んで、素晴らしい一年を過ごしました。

今はあの時の事を思い出したら、「友達」という言葉の概念をもっと深く理解できます。国籍と関係なく、ただ人と人、心と心の絆です。中国人は親切で、小さい礼節に拘泥しないです。日本人は礼儀正しくて、いつも他人に感謝の心を持っています。中国人と日本人が一緒にいる時、お互いに補い合っていると思います。人生の旅で、「友達」は神様にもらったプレゼントだと思います。私は彼らから私にとって一番大切なものをもらいました。それは幸せ、それは生涯消えることのない心の絆です。



ทานข้าวแล้วหรือยัง(もうご飯食べた?)

バンコクのワット・ポー 寢釈迦堂壁画は、
昔の人たちの声が聞こえてきそう